信濃毎日新聞
2010年（平成22年）7月21日（水曜日）　朝刊　13面

文化資料 創造的利用探る

デジタルアーカイブ 意義と可能性は

小布施でシンポジウム

文化的な資料をデジタル技術を使って文書や映像などの形で記録、保存し、公開するシステム「デジタルアーカイブ」の意義や今後の可能性を探るシンポジウムが19日、上高井郡小布施町の町立図書館「まちとしょテラソ」で開かれた。講演や、同町で行われているデジタルアーカイブ事業の実例紹介を通して、多くの人が情報を創造的に利用していくためにデジタルアーカイブをどう築いていったらいいのかを語り合った。

◆

丸川雄三・国立情報学研究所特任准教授は基調講演「デジタルアーカイブがひらく未来」で、システムをつくる工程を説明しながら、長所や短所を指摘した。

デジタルアーカイブの構築にはまず、デジタルカメラやパソコンを使って、資料を電子記録にする「デジタル化」をする。次に、記録にタイトルを付けて項目立てていく「インデックス化」をすることでデータベースとして検索できるようになる。その後、記録に意義付けをする文章などを添える「コンテンツ化」をする。

デジタルアーカイブは、保管や展示の効率化が進むことがあるほか、美術館や図書館などに足を運ばなくても、インターネットなどを通して、多くの人が膨大な資料も、分かりやすく見ることができる。

丸川特任准教授はインデックス化の問題点について、「将来的にどう使われるかが分からないため、報われないかもしれないという懸念が付きまとう」と指摘。質疑応答でも、「将来的に使うかどうかはっきりしない事業に公費を使うのはなぜか」といった質問が出た。

国立情報学研究所の中村佳史研究員は「一つのコンテンツ（情報の内容）は何年にもわたる研究の蓄積をもとに作られている。教育に資するものでもあるので、そこに公費を使うという考え方が成り立つのではないか」と話した。

小布施町立図書館の花井裕一郎館長は、デジタルアーカイブ事業「小布施人百選」を紹介した。小布施の地域づくりにかかわった人などの話を聞いて、インタビュー映像も含めてデジタル化して記録し、後世に向けて生きる知恵を継承しようとする試み。花井館長は、デジタルアーカイブの必要性について「確かに、『これが何になるのか』と思うときもあるが、100年前に生きていた人の知恵を、100年後という自分たちが生きていない時代の人に届けるサービス。100年後に必要になる知恵と信じている」と強調した。

丸川特任准教授はコンテンツ化について、資料の意義付けなどで体系的な知識が必要なため「専門家が参加しないといけない」と指摘した。だが、今後多くのコンテンツが構築されることで、多くの人がより簡単に文化資料に触れられ、複数のコンテンツを組み合わせて新たなコンテンツをつくることも容易になると説明。著作権や肖像権を守る制度の必要性を述べた上で「専門家でなくても、新しい価値を見いだし、発信できるようになる。誰もが創造的なことができる可能性を持っている」と話した。

小布施町の事業ではほかに、江戸時代末期―明治期の地元の豪商・高井鴻山（こうざん）の蔵書コレクション「鴻山文庫」のデジタルアーカイブ化や、同町の地図から観光情報を検索したり、現在の地図と古い地図を見比べたりできる米アップル社の端末向けのアプリケーション「小布施ちずぶらり」の開発を発表。古い蔵書や古地図などの資料をコンテンツ化することで、保存している施設や、資料への注目度を高め、価値を創出することができると強調した。

デジタルアーカイブの意義や可能性について話し合ったシンポジウム＝小布施町立図書館「まちとしょテラソ」

「小布施人百選」事業紹介 100年後に知恵届ける